

大学教育を考える

第42回 学校社会学研究会（於：芝浦工業大学） 報告 2024年9月9日 12:00～12:50

武内 清（敬愛大学客員）

浜島幸司（環太平洋大学）【オンライン】

はじめに

- 今回の報告は、研究論文の発表ではなく、報告テーマ（大学教育を考える）に関する問題提起と、参考資料の提供である。
- 最近オートエスノグラフィー（autoethnography）の研究も多く見られるようになってきている。「自分」の体験や主観から大学教育に関して感じることを「語り」、聞き手の「共感」が得られるかを探りたい。

1 今の大学教育に関して感じること3点

➡ ① 大学教員と学生の関心のズレ

教師が学生に教えようとしていることと、学生の関心にはズレや隔たりがあるのではないか。そして、大学教育の内容は、学生の将来には役立っていないのではないか。

➡ ② 大学の入学偏差値の問題

入学偏差値による大学格差が、今、意味をなさなくなっているのではないか。

➡ ③ 学生たちは、大学の授業外で学んでいる

学生は授業よりその外、つまり部・サークル活動、交友関係、アルバイトなどで、学んでいるのではないか。

2 これまでの大学生調査の結果や知見

4

1 であげた 3 点とは、逆のことが多い

- ➡ ① 大学授業、大学知の重要性；大学ならではの知識の探求や共有がある。大学知を媒介にした交友関係。情報化社会で基礎的知識が教師から提供され、学生の資質能力が養われる。大学で学んだ知識は汎用性があり、将来の職業生活で役立つ。
- ➡ ② 大学偏差値（大学類型）により学生の能力やキャンパスライフの違いが生じる。大学チャーター（イメージ、期待）による学生への影響も大きい。
- ➡ ③ 文部科学省の大学改革の提唱や大学の改革で、今は勉強中心の学生生活が主になっている。

3 実際は1と2の間 大学生調査データの読み直しも必要

- ➡ ①「卒業時の知識能力」は「現在の知識能力」を經由して「所得」に影響を与える（矢野真和 2023）。大学教育が社会に出てからの幸福や社会貢献意識に影響する。
- ➡ ② 大学知は多様で柔軟なものであり、受験で得られる（暗記）知とは別物である。大学偏差値の見直しが必要である。
大学教育の工夫されて実践で知の大学差は解消し、多様な知が開花している。
- ➡ ③大学での学びが、「主体的・対話的で深い学び」に変化する必要がある。米国流の授業、遠隔（デジタル）授業も含めた授業改革が必要。

4 大学における教育支援のあり方

①一元的な提示は難しい

■地域×規模×大学の熱意（意欲）

大学：何を卒業までに習得・修得させたいか？

学生：卒業後に何が習得できると有利なのか？

■大学ランクは関係あるのか？

アカデミックスキルを一元的に教えることは無理

学術を本格的に学ぶ、専門家になる→必要

学術よりも組織、他者ととともに生活→不要？

4 大学における教育支援のあり方

②リメディアルの現実

7

46 リメディアル教育研究 第10巻第1号 2015

会員の声

今こそ、我々の実践を発信すべき時
(リメディアル教育は正義である)

鷺北 貴史^A

現在、大学進学率は5割を超え、3割近い大学がボーダーフリーになっている。私は、週に7か所、大学・高校等で講義をしているが、学生・生徒の能力は、非常に多様化している。この時代に「上位校の常識が正義であり、上位校の在り方こそ、大学のあるべき姿だ。」と主張される先生方に、私は問う。ボーダーフリーの現場の教壇で半期講義をしてみてください。それでもあなたは、同じ発言ができますか？

4 大学における教育支援のあり方

③実際に4年講義してみた

8

地方の現状は厳しい。人口は流出し雇用や設備投資も滞っている。これまで函館を支えていた観光業もコロナ禍で大打撃となった。新卒採用を見合わせる企業も出てきた。学生に目を向ければ入学後に目標を見失ったり、経済的に困窮したりで退学・留年（立石・小方 2016）を選択する者も出てくる。学生の総数が少ない分、1名でも生じるとその割合が大きく、大学運営のみならず教職員間に心理的な衝撃を与える。いつ本体がなくなるかわからないので、自分の任期更新よりも短大が存続することを心から願っている。

学生の高校までの基礎学力は高いとはいえない。学習習慣も定着していない。大学デビューの困難さは大学生文化研究者ならば自明のことであるが、このレベルから学修と資格取得を促さなければならない。アカデミックスキルの習得方法も学生の現状にあったやり方で対応しなければならない。企業へのエントリーシートや履歴書の完成、面接対応ができるレベルにまで押し上げていくことが優先となる。サークル活動はあるものの授業中心の生活である。

(浜島, 2021 : 60)

4 大学における教育支援のあり方

④所属先の地位と指導の必要性

- ➡ 専任（任期含む）と非常勤の違い
専任は学生に全方位に関わる
専門も重視されるが、それ以外も重視される
- ➡ 学生は「指導」が当たり前となった
大学生の「生徒化」の議論
自主性よりも、他者の指導を望む時代になっている

次スライド（→ベネッセの調査）

4 大学における教育支援のあり方

⑤教員の指導を望む学生が増加

◆大学教育観②

【16】

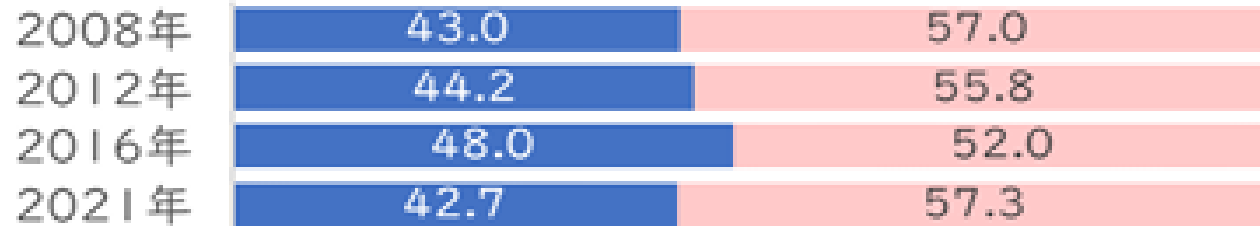
● 「学生生活は大学が指導」「知識・技能の獲得は大学の責任」が増加

◆大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。

⑦将来決定

【A】学生は将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい

【B】学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい

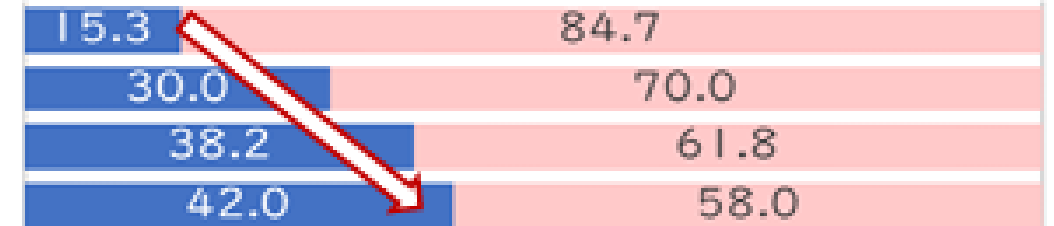


⑧学生生活

(%)

【A】学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい

【B】学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい



4 大学における教育支援のあり方

⑥大学への「まなざし」が強化

■説明責任

単位・卒業だけでは済まされない

地域貢献、就職実績、卒業生の活躍→募集に影響

「学べる」「身につく」 + a (例：社会でも必要とされる)

■クレーム対応への備え

学生（+保護者）の訴えも視野に入れる

授業評価等、「サービス」の台頭への危機感

4 大学における教育支援のあり方

⑦人口減少下での大学間サバイバル

日本の大学数 2024年度は796校

新設5校、募集停止2校で昨年から3校増

旺文社 教育情報センター 2024年6月24日

当記事では、2024年度時点での日本の大学数をまとめた。あわせて、全国の大学の学部・学科数、学べる学問分野の設置状況なども掲載した。日本の大学に関する基礎データとして示したい。

※本稿の集計データは『教育時代4月臨時増刊、8月臨時増刊』（旺文社）ならびに文部科学省資料を基にしている。

■新設校がある一方で募集停止も

2024年度の日本の大学数は、796校であった。昨年度の793校から3校増加した。

大学の数は資料によって集計対象が異なることがあるが、本稿では当該年度の学生募集を行った大学を対象とし、募集を停止した大学は数に入れていない（学士の学位が取得できる大学校は含む）。2024年度は、北海道武蔵女子大学、仙台青葉学院大学、愛知医療学院大学、高知健康科学大学（いずれも私立）、東北農林専門職大学（公立）が新設された一方で、恵泉女学園大学、神戸海星女子学院大学が募集を停止した。

今後は東京医科歯科大学と東京工業大学の統合（2024年10月）、桃山学院大学と桃山学院教育大学の統合（2025年4月）、学習院大学と学習院女子大学の統合（2026年4月）が予定されている。また、ルーテル学院大学と高岡法科大学が2025年度の募集停止を決めている。

なお、2019年度の制度改正以降、私立の専門職大学の新設は継続しているが、減少

した。これまでは国公立の活

5 参考資料 文献

13

① 浜島幸司「キャンパスライフと学生の成長—コロナ禍で問われる大学の姿勢」高等教育研究 24号 2021年

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaher/24/0/24_49/_pdf/-char/ja)

② 武内清・浜島幸司「学生の変化と学生支援」（「東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要4号（2018.03）」）

(<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/cahe/wp-content/uploads/2018/05/eb559e9fdcd6c4870c71324861dc8c16.pdf>)

オートエスノグラフィー (autoethnography) とは

14

- ▶ <オートエスノグラフィー (autoethnography) は、著者が自己省察および著述を通じて自身の個人的経験を調査し、その自伝的なストーリーをより広い文化的、政治的、社会的な意味・理解へと結びつけるための質的研究の一形態です。具体的には、研究者が自身の経験を詳細に記述し、それを文化的な文脈で分析します。これにより、個人的な物語が社会全体の理解に貢献することを目指します。例えば、研究者が自身の文化や社会の一員としての経験を記述し、それを通じてその文化や社会の特性や問題点を明らかにすることができます。オートエスノグラフィーは、コミュニケーション研究、教育、社会学、人類学など、さまざまな学術領域で用いられています。この方法は、研究者自身の視点を重視し、主観的な経験を通じて新たな洞察を得ることができる点が特徴です。> (Bing Chat)
- ▶ <個人的なことを書けば、そのままAEになるというわけではない。自分のことを書いた文章をAEたらしめる必須要件として、多くの概説書が挙げている相互に関連する3つの要素がある。それは、〔A〕 auto (自己性、主観性、個人的な体験)、〔B〕 ethno (集団や文化の信念、慣行、アイデンティティ)、〔C〕 graphy (記述、解釈、表現) である [e.g. Adams & Herrmann 2020: 2]。すなわち、〔A〕を用いて、〔B〕を〔C〕することで、AEは日記や自叙伝 (autobiography) や自己語り (self narrative) と区別される表現行為となるのである。いずれの要素が欠けても、一般的に、AEとはみなされない (北村 毅「オートエスノグラフィで拓く感情と歴史 序」 (『文化人類学』 87/2 2022.9))

大学教育の効果を考える

武内清

15

○旧世代が昔の大学時代を振り返ると、授業から何か学んだという記憶は少ない。授業の休講も多かったし出席率も低かった。それでも大学卒のメリットはたくさんあった。大学生という身分でいろいろなことができ大企業にも就職できた。有名大学の学生はその大学イメージと周囲からの期待で社会化された。

○しかし2000年代に大学イメージの時代は終わり大学の実質的な教育の真価が問われる時代が来た。大学選びの基準は入学偏差値や有名度ではなく、その教育内容や取得できる資格、就職実績に移っていった。

○文部科学省の大学改革の提唱もあり、「特色GP」で教育予算の傾斜配分がなされ、各大学も様々な授業改革をして、教育を工夫し学生の学習を促していった。学生も「生徒化」し真面目に授業に出席するようになった。その成果は上がっているのであろうか。

○学びは授業のように対面関係でなく、弟子が師匠の働く姿を後ろから見て学ぶもので、模倣こそ学びの真髄であるという説がある。それは今少なくなっている。昔の大学では学生は授業から学ぶことは少なかったが、大学教員の後ろ姿や読書を通して多くを学んだ。それは今の大学の少人数ゼミやアクティブ・ラーニングに継承されている面はある。

○大学に入る為の受験勉強と大学での学びとの関係はどうであろうか。入試問題の工夫もされているが、入試の画一的な答は生徒の旺盛な探求心を摘んでしまうとも考えられる。一方受験は多くの情報や選択肢の中から、限られた時間の中での的確な答えを見出すもので、その能力は汎用性が高く、企業が偏差値の高い大学生を好んで採用するのはその証である。

○大学生の学びは、大学に入ってからでは遅すぎるという見方もある。高校時代に勉強しなかった学生は大学でも勉強しない。読書や部活動や交友に関しても、高校時代の生活と大学生活は関連している。（「モノグラフ高校生」vol.7、1982年、ベネッセ）。大学生の「資質・能力」は高校時代までに形成されたものがそのまま継続されることが、大規模な時系列調査で明らかにされている（溝上慎一編『高校・大学・社会 学びと成長のリアル』学事出版、2023年）。

○大学時代の学びは、社会でのキャリアに役立つのであろうか。「卒業時の知識能力」は「現在の知識能力」を経由して「所得」に影響を与えている（矢野真和『今に生きる学生時代の学びとは』玉川大学出版部2023）。さらに、大学教育が社会人の生活満足度（ウェルビーイング）や社会貢献度にどの程度影響しているかも検討し大学教育の効果を考えたい（Q 武内）。

（内外教育 2024年2月9日）

新型コロナ後の学生生活

武内清

16

新型コロナ禍の休校や遠隔授業を経験した大学生は、今どのような学生生活を送っているのだろうか。2023年十月に実施された全国大学生協組合連合会の学生調査(104大学・9832人)のデータから見てみたい。

「昨年から全ての授業が対面授業になり、ようやく大学生活を謳歌できているように感じます。好きな服を着て、自分の興味のある授業を綺麗な教室で受けることができ、この大学に入学して良かったなと思います」(4年女性)。「様々な考えをもつ友人や同じ趣味をもつサークル仲間に出会えた」(3年男性)。「奨学金がもらえず、アルバイトと学業の両立に悩んでいます」(3年女性)。

授業は、「すべて対面」が54%、「両方・対面が多い」が33%で九割近く対面が主の授業を受け、ほぼコロナ以前に戻っている。大学生活の重点は「勉学や研究」と答える学生は33%と過去最多となっている。「豊かな人間関係」は16%と少ない。現代の学生文化は真面目化している。一方、サークル・部活動への参加率が60%と、コロナ以前の水準(68%)までには至っていない。アルバイトを現在している学生は、75%いる。1週間の就労平均は12時間。収入は一ヵ月平均五万円弱で、生活費にも充てている。今の大学の大学生活が「充実している」は90%ときわめて高い。「大学が好き」も93%と多い。

新型コロナ体制が終焉し、大学の日常が戻ってきた時の喜びを忘れず、対面の授業や友人関係、サークル活動の価値も再認識したい。私語がなく、集中して主体的に深く学べる遠隔授業の良さも生かしたい。

大学生の全体的傾向とは別に、大学の国公と私立の差、大学格差、地域差、ジェンダー、親の経済格差も気になる。デジタル環境も含め施設が貧弱で、教員の授業や業務負担が多く、学生支援も手薄で、授業料や生活費の為にアルバイトに明け暮れる学生の多い大学も存在する。様々な社会的格差の視点も入れた大学と学生生活の実態の解明と、その対策を期待したい。(内外教育 ひとこと 2024年6月7日)

ポストコロナ期の学校教育

17

○「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という諺のように、新型コロナ禍の経験が、五類への以降と共に忘れ去られようとしている。当時の経験をトラウマにすることは避けなければならないが、その時の経験から学ぶことも必要である。

○新種のコロナの再発に備えて、医療の備えと同時に個人の感染対策も継続したい。過密を避け、うがいや手洗いを継続し、健康維持に努める。同時に、新型コロナ禍で培った様々な方法は、教育の分野でも保持したい。

○新型コロナの蔓延で、休校、遠隔授業、学校行事の削減、マスク、黙食など、級友との距離をとることが奨励され、対面行動が減少し、子ども達が引きこもり気味になる傾向が増した。その補填は必須だが、同時に新型コロナ期に身についた新しい心性や方法も保持したい。過剰な人との接触や集団への同調などから解放されて、個人の主体的な行動や学びは増加した。学校における集団同調行動、退屈な行事、無意味な規則など、それらがなくても困らないこと、デジタルの便利さを子ども達はコロナ禍の中で経験した。

○ICTの活用は、コロナ後の教育でも必須である。教育再生実行会議の第12次提言（令和3年6月）では、「対面指導を基本としつつ、児童生徒の発達段階や学ぶ内容に応じて遠隔・オンライン教育を適宜取り入れ、双方の良さを最大限に生かすことが重要」と述べている。東洋経済新報社の2022年12月の調査で、「GIGA端末が整備されて教育全般が効率化された」という教師の回答は6割に及ぶ。

○高等教育に関して同提言は「面接授業と遠隔・オンライン教育との双方の良さを最大限に生かした教育の可能性を追求することが重要」「（遠隔のメリットとして）自分のペースで学修がしやすい、授業の工夫・質の改善につながる」と述べている。

○全国大学生協の大規模な学生態調査（2022年10月実施）の結果をみると、遠隔授業と対面授業の組み合わせで授業を行っている大学が多く（全体の54.8%）、学生生活の中心は「勉強」という学生が一番多い（30.3%）。学生の一日の勉強時間は増加し（3年前より14分増）、大学生生活充実度も上昇している（87.5%）。

○大学生がWEBに接する時間は長い。生成系知能（AI）「チャットGPT」の扱いが問題になっている。その回答はあたりさわりのない平均的な内容で、個人の自律性を損なう場合もあり、出典や独自性を求められる学生の学びには不十分であるが、アイディや論旨の生成機能もあり、学生の主体的な学びに利用したい(Q武内)。

（内外教育 2023年6月30日）

大学の遠隔授業の効用

武内清

18

新型コロナ禍で、大学は新学期より遠隔授業をはじめ、そのまま継続した大学が多い。学生の通学時の過密を避けたいという理由が主なものであろう。また遠隔授業を行う設備とデジタル能力が教員と学生にあったということでもある。

遠隔授業には大きく二種類あり、一つはズームのように同時配信・双方向の形態、もう一つはオンデマンドの形態。学生からは、遠隔授業に対しては不満も聞かれる。「ネットが繋がりにくい」「教室で皆と一緒に勉強したい」「キャンパスライフを楽しみたい」等。

教室での授業より遠隔授業の方が、学生の自主的学習時間が増えるということを指摘したい。

昨年十一月に行われた文部科学省の「全国学生調査」によれば、日本の大学生は授業にはよく出席する（週に11時間以上出席する学生が72%、平均17時間）が、「予習・復習・課題など」をする学生は少ない（週に五時間以下と少ない学生が67%、平均五時間）。

アメリカの大学には、学生を勉強させる仕組みが整備されている。各授業の必読文献が配布され、討論、ノートの点検、レポート、試験問題と学生を勉強させる仕組みは整っていて、学生の自主的勉強時間は長い。日本の大学でも授業改革が行われているが、「全国学生調査」の結果が示すようにその成果はあがっていない。それが、遠隔授業で様変わりした。

遠隔授業になると、通学時間、友人との私語、教師の叱責や無駄話等がなく、学生は授業の内容や課題に集中でき、自主的学習時間が確実に増える。教室にいる時のようにスマホをいじったり私語したりをして、授業をやり過ごすことはできず、課題の文献を自分でじっくり読まざるを得ない。

遠隔授業の効用は意外と大きい。今後は遠隔授業も定着して、教室での授業との併用になることが考えられる。これを契機に日本の大学の授業や学生の学び方が変わることを期待したい。

（内外教育 2020年8月4日）

一定の距離のある関係

武内清

19

○宇佐美りん『推し、燃ゆ』（河出書房新社、2020）の中に、印象的な一節がある。「あたしは推しの存在を愛でること自体が幸せなわけで、お互いがお互いを思う関係性を推しと結びたいわけではない。一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれる」

○今の時代、このような一定の距離のある関係はアイドルへの推しだけでなく日常的な行動や教育の場面においても大切になっている。

○新型コロナの蔓延で一時学校が休校になり、学校での対面での人との接触や協働学習、部活動が制限されるようになってきている。人間同士の交流こそ教育の基本と考える立場からは、由々しき事態である。しかし人間同士の直の交流が必須とする考えは見直されてもいい。

○対面での授業や集団行動が、児童生徒や教師にとっても一番好ましいとこととは必ずしもいえない。対面行動はそのことに多大なエネルギーを使う。教室での教師の発言は、他の子どもへの叱責や無駄話など、教科内容と関係のないことで費やされる時間も多し。発達段階から考えると小学校においては生の直の人間関係が大事であるが、中学高校さらに大学においては気を遣う対面での場面は少なくして、遠隔教育が導入されてもよい。対面より遠隔教育の方が適している児童生徒はいるし、実質的な学習時間は長く、それに適した教科や学び方もある。

○小中学生一人一台配布されて情報端末を有効に生かす教育のあり方が工夫されてもいい。情報端末を利用して、家庭と連携した学習も可能である。遠隔教育で、学級の人間関係の軋轢が生じるいじめや不登校も少なくなるであろう。遠隔授業を体験した大学生は時間、場所を問わずに取り組めることと自分で調べ考える主体的な学習をメリットとしている。

○藤原新也は、アメリカのフリーウェイでの見も知らない者同士の軽くなずき合いが、知り合いの関係以上に、「お互いの命を思いやるようなちょっとした感情の機微が垣間見え、軽やかな後腐れのない感情を裸のまま交わし合うとことのできる逆の現象を生む」と指摘している（『アメリカ』情報センター出版部、1990）。多田道太郎は「恋愛についていえば、それはオリジナルの向こうに、オリジナルを超えて自分だけの夢をみることであり」と述べている（『管理社会の影』日本ブリタニカ、1979）。

○このように、新型コロナ禍蔓延が日常化した現在、対象と一定の距離をとり、対人関係に煩わされず、自分の夢を描くことや、主体的な行動をとることは大事になっている。
（内外教育 2022年8月23日）

終

残りは質疑応答の時間となります